

ホーフマンスタールのガリチアからの手紙

小 粥 良

序.

ガリチアという土地の名が、オーストリア文学にときおり顔をのぞかせることが、以前から、筆者にはなんとなく気になっていたのだが、しかし、それがどのような土地かについての具体的なイメージを持つようになったのは、数年前に実際にそこを訪れて以降のことであった。それまで、ザッハー＝マゾッホのガリチアを描いた短編なども読んでいなかったし、ましてや、オーストリア帝国時代にガリチアから切り離されて別個の行政単位となったブコヴィナのドイツ語文学には、まったく触れていなかったのだから、たとえば、ヨーゼフ・ロートの『ラデツキー行進曲』、トーマス・マンの『魔の山』でナフタの生い立ちについて述べられている個所、フーゴ・フォン・ホーフマンスタールが東部ガリチアのトゥルーマチ (Tlumacz、ポーランド語名 Tłumacz、現ウクライナ、イヴァノフランクィウスク州 Тлумач) での兵役期間中にレオポルト・フォン・アンドリアーンに送った手紙 (1896年5月4日付け) 等々を通して、漠然と「辺境の地」という印象を受けていたにすぎない。

1. ガリチアからの手紙

特に、最後に言及したホーフマンスタールの手紙は、短い文章であっても、印象を決定づけたように思われる。そこには、「醜い」、「惨め」、「汚い」、「不機嫌」、「意気消沈」、「無気力」、「耐え難い」、「怠惰」、「悪臭を放つ汚水」等々の否定的な語がずらりと並んでいる。

(…) 僕も君に手紙を書きたいのはやまやまだ。でも、考えが全然浮かばない。僕を取り囲むすべてのものは、君が考える以上に醜い。すべてが醜く、惨めで、汚いのだ、人間も、馬も、犬も、子供たちでさえ。僕はとても意気消沈してしまって、気力が無い。ゆうべは、薄暗がりの中を四つん這いになって僕の部屋に這いずり込んできて、僕の足に口づけした、一人の年老いた乞食にひどく驚かされて、その後は、甲斐の無い大きな危険が去った後のように、疲れて、不機嫌だった。あまりよく眠ることもできなかった。僕の部屋のすぐ傍には、ひどく醜い年老いた野良用の馬たちがいて、夜中に一瞬たりとも静かにしてい

てくれないのだ、こいつらときたら。食事も、ほとんど耐え難いほど不味い。それに、本当に妙な天気で、まったく春らしくなく、いつも薄暗くて寒々としており、どの季節のようでもない。そして、目に入るわずかな木々は、まだ緑の葉をつけていない。

ねえ、君、僕はいくつかの些細なことどもを変えられることができるかもしれない。けど、僕は信じ難いほど怠惰になっている。何故これらの事物が、僕の上にこれほどの力を振るうことができるのか、理解できない。僕は何時間も座ったままでいて、一冊の書物を取るためにさえ立ち上がろうとしない。僕が怠惰すぎるのか、それとも、悪臭を放つ汚水にオーデコロンを振りかけても何になるか、という具合さ。そんな状態は、本当に気がかりだ。¹⁾

ヴェルナー・フォルケのホーフマンスタール評伝にも、若き詩人の帝国東部での兵役体験は、やりきれないものであったという点が強調されている。（「トゥルーマチは、ホーフマンスタールには、悪魔の発明品のように思われた。」）²⁾

すでにそれより1年ほど前に、モラヴィアの小さな町ゲーディングでの兵役期間中にも、ホーフマンスタールは、1895年6月8日、日記に次のように記した。

とてもひどい^{デプレッション}落ち込み。毎晩の森での散歩、白樺、黒い水、沼沢地の草、なにもかも死んでいる、自分が自分自身に対してこんなにも無であり、こんなにも薄気味悪い。すべての生命が、僕から抜け落ちてしまった。³⁾

このゲーディングでの体験が『第672夜のメルヒェン』（1895）の成立の背景にあるようだ。⁴⁾そして、この物語と同質の雰囲気は、先に引用したアンドリアーン宛て書簡に描かれるトゥルーマチの様子にも濃厚に表れている。特に、ホーフマンスタールの部屋近くに繋がれている農馬への言及は、物語の主人公を死へと追いやる馬を想起させる。しかし、アンドリアーン宛てのトゥルーマチからの書簡が想起させる作品は、他にも色々ある。たとえば、いわゆるチャンドス書簡、『ある手紙』（1902）であるが、それは特に、このアンドリアーン宛ての手紙の次の部分においてそうである。

でも、その反面、すっかり良くもある。君にどう説明したらよいか、よくわからない。そういう状態は、内的な感覚を抜け、埋もれてしまっていたような多くのものを連れ戻してくれる。僕は、美しい生はひとを貧しくすると信ずる。いつも望むがまま生きられるなら、すべての力を失ってしまうだろう。ここで夜中に目を覚ますとき、僕は自分自身にじっくり寄り添っている。とても長い間そんなことは無かったほどの強さで。そんな風に僕は自分自身へと立ち戻る。

ずっと芝居を、それも自分の本質を密かに模倣する役（でもやっぱり役なんだ）を、演じていた人のように。これは、おそらく子供じみた愚かな考えなのだろうが、でも、僕はそれから逃れることができないでいる。僕の世界にとっては、こうした空想が背景を形づくる。⁵⁾

チャンドス卿と同じように、ある無気力の状態に陥っていたホーフマンスタールは、その状態を「すっかり良くもある」としている。それは、言葉では「どう説明したらよいか、よくわからない」なにか不可解な事態である。言葉では言い表しがたいのに、「そういう状態は、内的な感覚を拡げ、埋もれてしまっていたような多くのものを連れ戻してくれる」のだという。こうした状態の機縁となっているのは、チャンドスの場合と同じく、「事物」の影響であるが、それは、「醜く、惨めで、汚い」とされる、トゥルーマチで詩人の周囲を取り巻く事物の一切である。（「何故これらの事物が、僕の上にこれほどの力を振るうことができるのか、理解できない。」）この状態は一種の麻痺状態でもあって、それは「怠惰」と言い表され、彼は「何時間も座ったままでいて、本を一冊取るためにさえ立ち上がろうとしない」と打ち明ける——実際には、兵役の単調な日々を、ホーフマンスタールは読書で紛らわしていたことが、この時期のアンドリアーン（引用した箇所が続く、翌日に書かれた部分）、ベーベンブルク、ベーア-ホフマン、そして父親への手紙から知ることができるのであるが、それにしても「書物」（＝言葉）を取る気力の喪失は、やはりチャンドス卿の「状態」との親縁性を感じさせる。「怠惰」と呼ばれてはいるが、この状態は、詩人を真の自己へと連れ戻してくれるものでもある。（「ここで夜中に目を覚ますとき、僕は自分自身にじっくり寄り添っている。とても長い間そんなことは無かったほどの強さで。そんな風に僕は自分自身へと立ち戻る。」）ウィーンでの自分は、まるで「自分の本質を密かに模倣する役」を演じている演技者のようだった、というのである。（ここに「仮面」というイメージを読み込むことも可能である。）⁶⁾ このように、トゥルーマチからのアンドリアーン宛ての書簡には、ホーフマンスタールの創作行為の本質に触れるような何ものかが、表れていると思われる。しかし、なぜ、この不可思議な状態は、ガリチアで生じたのか、いやガリチアでこそ生じたのか、という問いが浮かんでくる。

II. 中心—辺境

それにしても、アンドリアーンへの書簡に描かれている彼を取り巻くトゥルーマチの環境は、なんと断片的で、取りとめが無く、不気味なことか。これは、前年のゲーディングからのエドガル・カルク・フォン・ベーベンブルク宛ての手紙と比べても、一層その度合いが強い。

ここには淡緑色の畑が広がり、その中に裸足で赤い頭巾を被ったスロヴァキア人の少女たちが、立っていたり、跪いていたりにして、そして、あちこち、水色や緑色にペンキを塗られた家々の並ぶ小さな村々を通して馬に乗っていき、そして、遠くの無色の空に、とても高いポプラの木に縁取られた人通りの無い長い並木道が続いているのが見え、これらのポプラの木は、非常に大きく悲しげに浮き立つのだが、これらすべての中に、僕は、ときどき、なんとも言いがたい、息を詰まらせるような孤独の感情を抱く。まるで、これらすべてが、まったく生に、本当の生に属しているのではなく、僕が理解せず、僕を不安にさせる奇妙な国に属していて、そしてそこに僕は、どのようにしてかは皆目わからないが、さ迷いこんでしまったとでもいうように。⁷⁾

詩人は、ゲーディングの兵役期間中、気晴らしのために、夕刻になると辺りの田園風景の中を馬で疾駆した。⁸⁾ 気晴らしとはいっても、孤独を紛らせるためではなく、むしろ「息を詰まらせるような孤独」に浸るためのようである。風景の描写において、このベーベンブルク宛ての書簡は、詳細であり、美しくすらあるが、それは「人通りの無い」、「まったく生に属しているのではない」荒涼とした風景である。

アンドリアーンへの手紙に描かれるトゥルーマチは、断片的で、現実味を感じさせないものであるが、ヴェルナー・フォルケが引用している父への手紙では、トゥルーマチの環境は、具体的かつ詳細に報告されている。

1896年5月には、トゥルーマチで兵器訓練を果たし、1898年7月には、(その間に予備役少尉に昇進していたのであるが) Cholotkof で勤務した。トゥルーマチと同じく、ロシア国境に近い、東部ガリチアの小さな市場町であった。トゥルーマチは、ホーフマンスタールには、悪魔の発明品のように思われた。彼は「兵舎から3分の、ユダヤ人シュヴェーフェルガイストの家」に住んでいた。「部屋は、1階にある。窓の前は、豚小屋だ。家の玄関先には、一日中魚や野菜の市が立ち、(…)人々も、馬も、犬もみすばらしく汚らしく、洗濯水は臭く、食べ物は湿った木材、傷んだ油脂、かび臭い空気のような恐るべき匂いがする。」彼は、勤務のだらしなさをこぼす。彼を若い将校たちと結びつけるものは、何も無い。彼の当番兵であるルテニア人の男は、ドイツ語もポーランド語も、一言も理解しない。にもかかわらず、ホーフマンスタールは、この味気なさや醜悪さの中で、ゲーディングにいたときよりも快適に感じる。なぜなら、彼は暇がたくさんあって、人々の間で孤立していたからである。「毎晩、僕はただ一本しかない道を、深いぬかるみを避けて、つまり、エーリアス・リーツァーとハイム・ディッカーの家の間の長い板の上を、行ったり来たりした。それは、市の立つ広場の

真ん中である。ここに、犬ぐらいの大きさのみすぼらしい馬を連れたルテニア人の農民たちが立っていて、ユダヤ人から騙されるのだ。そこではしかし、皆がよけて挨拶するので、僕は、何時間も、この雑踏の中で、一人ぼっちで静かな山の上にいるかのように、行ったり来たりして、プラトンか、ヘルダーリンの美しい真面目な詩を読んだ。僕が自分の人生を、多くの他の若い人々の人生と比較するなら、(…)僕はやっぱり自分が限りなく幸福に思える。なにしろ、僕がいつか、多くの人が理解する何かとても美しいものを書くということは、やはりありえそうなことなのだから。」この記述は、父親宛てのある一通の手紙から取ったものであるが、その若者らしくうぬぼれた調子は、その中に露見する人間的冷たさや、お高くとまった態度ともども、少なくとも部分的には、心配している両親に、彼らの息子が人生の事柄に対して超然とした態度をもっていることをはっきりと示すために、無理に作られ、演じられたものであっただろう。読書によって、ホーフマンスタールは「勤務」から離脱するのだが、読書の際の一般的気分は、ガリチアでは、絶え間ない精神的な虜囚の状態に縮小してしまっていた。彼は、アルテンベルクの『私はどう見るか』、ニーチェ、ヘルダーリンおよびゲーテの詩、ピンダロス、カトゥルス、バルザックおよびモーパッサン、トーマス・オトウェイの『救われたヴェネチア』を読んだ。チョルトコフにおいても、書物は、存在の空虚に対し、そして外的環境の貧しさに対し、バランスをもたらすものとなる。⁹⁾

フォルケは、この父への書簡に注釈を加えて、おそらく上述のアンドリアーンへの書簡を念頭に置きながら、「(…)ホーフマンスタールは、この味気なさや醜悪さの中で、ゲーディングにいたときよりも快適に感じる」と書いているが、その理由を「彼は暇がたくさんあって、人々の間で孤立していたから」としている。確かに、父への手紙では、その孤独を利用して読書にいそしんでいることが伝えられ、それが彼に幸福を感じさせることも語られている。しかし、これは、アンドリアーンへの書簡で触れられた一種の幸福感（「ここで夜中に目を覚ますとき、僕は自分自身にじっくり寄り添っている」とは別物であると思われる。なぜなら、それは、「一冊の書物を取るためにさえ立ち上がろうとしない」ような「怠惰」として現れたのであるから。

フォルケが、トゥルーマチからのアンドリアーンへの書簡を引用していないことは、いささか不思議である。二つの書簡（アンドリアーン宛てのものと父親宛てのもの）は、裏表のように互いに密接に関わっているように思われるからである。父への手紙が、両親への気遣いから「無理に作られ、演じられたもの」であったとすれば、親友アンドリアーンへの手紙は本音ということにならないだろうか。実際には、父への手紙のほうが具体的な記述がなされてはいるのだが、そうした

客観的な距離を取らずに、何か自分でもよく説明しえないような、ある「状態」を告白しているとはいえないか。そして、そこでは、自分がそれまでずっと（つまりウィーンの両親の許で）芝居を演じていたことも告白されているのである。「芝居（Theater）」、「自分の本質を密かに模倣する役」に對置されているものは、「自分自身」であり、前者がウィーン（中央）での詩人のあり方を示している一方で、後者はトゥルーマチ（辺境）の環境と結びついている。また、この関係は、洗練-野卑、美-醜、虚構-現実、芸術-人生などの対立項と絡み合っている。「美しい生はひとを貧しくすると信じる」と、詩人が告白するとき、野卑で醜悪な辺境にこそ、豊かな生が存在することが暗示される。

それにしても、特徴的なのは、若き詩人が孤独の中に埋没していて、決して現地の人々に寄り添ってはいないことである。彼の中で起きている事態を惹き起こすのは「事物」であり、人との関わりではない。つまり、カルチャー・ショックというのとは、いささか異なっているように思われる。彼は市場の雑踏の中でも、人々から挨拶を受けながらも、よけて道をあけてくれるのをいいことに、超然と、読書に没頭しながら歩き続ける。現地の人間たちで言及されているのは、アンドリアーンへの手紙では、「乞食」であり、父への手紙では「ユダヤ人シュヴェーフェルガイスト」、ドイツ語もポーランド語も解さない「当番兵のルテニア人の男」、「エーリアス・リーツァー」、「ハイム・ディッカー」、「馬を連れたルテニア人の農民たち」、「ユダヤ人」、「雑踏」といった、家の持ち主の名前だけの言及であったり、集合的な匿名的存在であったりと、温かみのある人間的な交流は一切感じさせない。現地人に対する詩人のポジションは、飽くまでアウトサイダーのそれであり、観察者のそれである。特に、父への手紙では、フォルケが言うように「人間的冷たさや、お高くとまった態度」が露わになっている。自分はこのように惨めな者たちのようではなくて幸運だったという、両親への追従に満ちた公式的態度の表明と解すこともできよう。だが、それがポーズであったとしても、では真実はその逆かということ、そうではない。アンドリアーンへの手紙においても、彼は、決して、人間に共感しているようにはみえないのである。人間どころか、生き物にさえ。（「すべてが醜く、惨めで、汚いのだ、人間も、馬も、犬も、子供たちでさえ。」）

この点は、手紙を受け取ったアンドリアーンも気づいたようである。彼は返信（5月10日付け）の中で、婉曲に詩人の孤独を気遣っている。また、取りとめの無い詩人の心的状態の告白や、先に引用した箇所が続く後半部分に書かれていた読書体験（オトウェイの『救われたヴェネツィア』）に関するコメントに対しても、正直に「よくわからない」と書いている。

（…）僕も君の手紙を喜んだ。一方で、僕は、君が手紙に書いて寄こしたような君の状態を、どうもよくわからないとも思う。君は滅入って意気消沈してい

ると言い、君が物語るような事物が、君の上にそれほどの圧倒的な力を振るうことができることを驚き怪しんでいる。だが、君は、本来君にとって最重要であるはずの事柄については、何も語ってくれない。だって、君は将校としてその地にいるというのに、同僚については何も語らないのだから。君は彼らを助けてやることは、まったくできないのかい？ハルテルのフルーレは実に見事だよ。イギリスの作品が君に与えた印象は、君を再び立ち直らせてくれたのに違いない。その印象の詳細は、もちろん、僕にはやはりよくわからなかったけれどね。これらの点について、君は僕にウィーンで説明してくれるよね？そして、本当にすぐに、君がどんな具合か、そしてガリチアで何が起きているのか、僕に書いて寄こしてくれたまえ。僕はよく君のことを、愛情をこめて、考えている。¹⁰⁾

アンドリアーンは、詩人が陥っている状態の異様さに気づき、それが彼の孤独に起因していると考えたのであろう。さりげなく、同僚の将校たちとの交際へと促している。そして、現実の世界で起きていること（「ガリチアで何が起きているのか」）に、詩人の関心を向けようとしている。だが、それだけではなく、アンドリアーンには個人的な関心もあったようだ。彼は、オーストリア帝国の上級官僚（第一次大戦中にはポーランド担当の大臣にまでなった）として、特にガリチアのポーランド人とルテニア人の問題に詳しくあったという。¹¹⁾ ホーフマンスタールからの現地情報を、本当に待ちわびていたのだろう。

一方、ホーフマンスタールの孤独は、同じ頃、リヒャルト・ベアー-ホフマンに宛てて書かれた手紙にも言い表されている。

僕は今、ほとんど毎日、何時間もととても小さな醜い部屋に一人きりでいて、落ち着いてよく一切のことを熟考することができます。僕は意気消沈してはおらず、かなり恒常的な、ある静かな高揚の状態にあります。それを快活と呼んでもよいでしょう。僕はとても多くあなたのことを思い、私たちの関係のことをじっくり考えるのですが、悲しい気持ちではなく、幸福な気持ちでそうするのです。しかし、僕は、一種奇妙な種類の憧憬の念に打ち克つことができません。僕は、この冬、あなたと話しをすることがあまりにも稀であったと、強く感じています。どうか、この夏、いつかよい折にあなたに会うことができるよう、便宜を取り計らってください。¹²⁾

アンドリアーンが婉曲な助言を書いたのと同じ、1896年5月10日に書かれたこの手紙は、詩人が相変わず孤独に過ごしていることを示している。彼は、同僚の士官たちとの交流を求めせず、ウィーンの年長の友人との親密な言葉の遣り

取りに、孤独への慰めを見出そうとした。わずかに年少のアンドリアーンとは親称を用いる仲であるが、8歳年上のペーア-ホフマンには敬称を用いており、非常に親密な間柄ではあっても、おのずと、手紙を書く態度も異なっていると思われる。アンドリアーンには、「とても意気消沈して」いると書いたのに、ペーア-ホフマンには、その逆のことを書いている（「僕は意気消沈してはおらず（…）高揚の状態にあります」）。無論、アンドリアーンには、感じたままをありのままに、矛盾した、断片的な、直截な表現で書いたのだと考えられるし、6日という時の経過を考えると、ペーア-ホフマンに書いた時点でのホーフマンスタールが、自分の状態をより客観的に見るができるようになっていて、年長者に心配をかけまいと配慮する程度の冷静さを取り戻しているとしても、それは当然であろう。しかし、この手紙にしても、詩人の想念はあちこちへさまよい、なにか熱に浮かされたような感じを与える。たとえば、詩人は、前後の脈絡なく、唐突に次のように書く。

僕は女性については多くを語りたくありません。しかしまあ、奇妙なことです、彼女たちとあまりに多く一緒にいると、どれほど魂が干上がってしまうことか。僕は言いようも無く夏を待ち焦がれています。僕は、僕たちのような人間が決して存在したことが無かったと信じます。しかし、僕たちは弱くもなく、悪くもないのです。僕たちは、人生を乗り切る可能性から、締め出されてしまっ
はいません。¹³⁾

夏にペーア-ホフマンと会うことを楽しみにしているという趣旨の一文の挿入は、この文脈の中では、ほとんど愛の告白のように響いてしまう。ウルリッヒ・ヴァインツィアールのホーフマンスタール評伝『*Hofmannsthal: Skizzen zu seinem Bild*』（2005）は、ホーフマンスタールがペーア-ホフマンに対して抱いていた感情の激しさを、もっと後の手紙やそれにまつわる挿話から鮮やかに描き出している。¹⁴⁾ それをホモエロティックな感情と呼んでかまわないのか、あるいは、たんにホモソーシャルなものと考えべきか、判然とはしない。ついであるが、アンドリアーンの場合には、明らかにホーフマンスタールに対するホモエロティックな感情が存在していたと推測される。¹⁵⁾

若きホーフマンスタールの文通から見えてくるものは、ウィーンの作家たちの間での極めて親密な交流である。それは、モラヴィアやガリチアの荒涼とした光景とは対極にある、濃密で過剰な関係性の世界であり、そしてそこでの生活は、なにか人工的で、芝居じみている。ペーア-ホフマンへの同じ手紙に、詩人は次のように書いている。

ウィーンで僕らが送っている生活は、よくありません。少なくとも、それは、時おり、非常に地味な旅行によって中断されるべきでしょう。小さな美しい町や、田舎での滞在によって。僕たちは、フランス風のサラダと凍ったものしか食べない高級娼婦のような仕方で、精神的関係の中に生きています。¹⁶⁾

III. 「出自にまつわるコンプレックス」

「小さな美しい町」は、まさにこの時ホーフマンスタールが兵役生活を送っていた、ガリチアの辺境の町トゥルーマチを連想させずにはおかない。インターネットで、この町について調べると、「ShtetLinks」のページが現れた。主として北米在住の東欧系のユダヤ人が、自分たちのルーツを調べるための英語サイトと思われる。シュテットル(shtetl)と呼ばれたユダヤ人が多く住む小さな町々が、ガリチアにはおびただしく存在していた。トゥルーマチもそのようなシュテットルの一つであった。

トゥルーマチのユダヤ人は、主として、小規模な商業や手工業に従事し、裕福な者たちは、木材の取引やアルコール飲料の製造に携わっていた。ハシディズムは19世紀にその地で信奉者を増やした。1888年には、ユダヤ人の人口は1,756人(人口の43%)、1900年には2,097人(39%)、1910年には2,082人(36%)を数えた。デ・ヒルシュ男爵基金が、この町に一つの学校と一つの銀行を設立した。¹⁷⁾

これらの数字から、1896年頃には、人口のおよそ40%を占める2000人前後のユダヤ人が住んでいたことが推測できる。このページには、町の著名人の名前と簡単な経歴が紹介されているが、その中に、Leizer Schwefelgeist という名前が見える。

(…) 彼は、この町に一軒の小さなホテル兼食堂を開いた。彼は副町長、町議会議長、傷痍軍人協会書記を務め、商人組合のメンバーでもあった。慈善行為で知られ、ポーランド人社会に受け入れられ、ソコル・クラブのメンバーであった。空想や幻想すれすれになるほど、想像力に富んでいた。¹⁸⁾

年代の記述が無いので、はっきりしないが、どうも戦間期のポーランド領時代についての記述であると思われる。そして、この Schwefelgeist が、ホーフマンスタールに宿舎を提供していた Schwefelgeist と、同一人物または縁故者であるかどうかは全くわからない。トゥルーマチについてのメモリアル・ブック(yizkor book)が1976年にテルアビブで出版されており、¹⁹⁾ そこから抜き取られたトゥルー

マチ住民の名前のリストを、やはり上述のサイトで見ることはできるが、その中には、Rietscher や Dicker という姓も混じっている。第二次大戦時の住人の記憶なので、エーリアス・リーツァーやハイム・ディッカーという名は、さすがに見つからない。トゥルーマチにしても、チョルトコフにしても、第二次大戦時のユダヤ人虐殺や強制移住の記憶と結びついた地名として、インターネットのユダヤ人関連のサイトに登場する。これらの町に住んでいたユダヤ人の大部分は、ホロコーストで殺されてしまったのだ。

筆者がここで指摘しておきたかったのは、トゥルーマチが典型的なガリチアのシュテットルであったという事実である。そこには、シナゴグがあり、伝統的な東方ユダヤ人の生活が繰り広げられていたはずだが、ホーフマンスタールの手紙の記述からは、そうした町の雰囲気はまったく伝わってこない。(ユダヤ人以外の住民の大部分を占めたポーランド人についての記述も無い。) 出てくるのは、ただユダヤ人の名前と、ルテニア人農民を騙す悪辣な存在としてのユダヤ人のイメージである(「犬ぐらいの大きさのみすばらしい馬を連れたルテニア人の農民たちが立っていて、ユダヤ人から騙されるのだ」)。この一見したところの無関心、あるいは、むしろ嫌悪の情は、注目に値する。

1792年にプラハからウィーンに移り住んで、商人として大きな成功を収めた曾祖父イザーク・レーヴの代から、ローマ・カトリックに改宗しイタリア人女性と結婚した祖父アウグスト・エーミールを経て、ホーフマンスタール家は着々と同化の道を歩み、フーゴの代にはユダヤ性など微塵も残っていなかったはずである。少なくとも、ヘルマン・ブロッホは、『ホーフマンスタールとその時代』の中で、そのようにみなしていた。²⁰⁾

しかし、その同化の過程は、それほど滑らかに、何の問題も無く達成されたと言えるであろうか。先にも言及したウルリッヒ・ヴァインツィーアルによる評伝『Hofmannsthal: Skizzen zu seinem Bild』(2005)の中の一章は、「ユダヤの血の幻影」という表題を付されている。ヴァインツィーアルの功績は、これまで敢えて口に出されることはほとんどなかった、ホーフマンスタールの「出自にまつわるコンプレックス (Herkunftskomplex)」²¹⁾という問題、また詩人の秘められた「友情と愛の秘義 (das Mysterium von Freundschaft und Liebe)」²²⁾を、同時代人の証言や書簡集の丹念な読解から、鮮やかに浮かび上がらせていることにある。

従来、同化については、ホーフマンスタールの伝記的背景として、事実が淡々と叙述的に語られるにすぎず、そこに潜む問題性を真正面から取り上げた研究は、筆者の知る限りでは、20世紀には見当たらない。確かに、ホーフマンスタールの「ユダヤ性」などというものは考えにくいし、筆者もそんなものを想定してはいない。しかし、ユダヤ的なものに対する否定的な態度、あるいは無視といったものの中に、

不安と孤独を抱えた同化ユダヤ人の問題が色濃く表れているということは、当然ながら、充分考える余地がある。²³⁾ ヴァインツィーアルは、前に述べた「友情と愛の秘義」の問題も含め、問題性の認知自体の遅れを、「自己秘匿の達人」としてのホーフマンスタールその人に起因するものとみなしている。²⁴⁾

ホーフマンスタールのガリチアでの体験が、なにかその後の彼の創作活動への転機をもたらすようなものだったとしたら、そのことは、彼がシュテットルという環境の中で生活していたことと、きつとなにか関係があるに違いない。まさにそれは、同化の歴史とともに、彼の家族の中で抑圧され、忘却されていったものただ中への帰還だったのではないか。（「ここで夜中に目を覚ますとき、僕は自分自身にじっくり寄り添っている。とても長い間そんなことは無かったほどの強さで。そんな風に僕は自分自身へと立ち戻る。」）そして、そこで彼は、ウィーンでの自らの生の人工性、虚構性にまざまざと気づかされるのである。ウィーンできわめて洗練された生活を送る彼とその友人たちの親密な交際の世界においても、真に重要なメンバーは全員同化ユダヤ人であった。にもかかわらず、その生活は、東方出自の名残を片鱗さえ見せず、ウィーン文化の極致といった趣であった。それは一見、自明のこと、なんの問題も無いことのように思われた。だが、もしも、それが「演じられた」アイデンティティーであったとしたら、また、それが一方で、大変な緊張と不安を隠蔽しているものだったとしたら、どういうことになるだろう。

ホーフマンスタールの文通を丹念に読み取っていくこと、その行間に滲み出るように、かすかに言い表された心の動きを敏感に感じ取ることが、作品の理解に新しい光を当てるのではなからうか。ヴァインツィーアルは、伝記的研究の意図を、「ただ、ホーフマンスタールの人物像をもう少しよく理解しようとする試みにすぎない」とし、「通常とは違い、作品は注意の中心に持つてはこられない」と断っている。²⁵⁾ しかし、作品をすべて伝記的な背景に還元するのも極端であるとしても、作品と作者を完全に切り離すことができるか考えるのも、やはり虚妄であろう。伝記的興味は作品の「価値」を明らかにするものではないかもしれない。しかし、伝記的理解は、過ぎ去った時代の作品に精彩を取り戻してくれる。少なくとも、その作者がなぜ、そのような作品を書かねばならなかったのかということに対する、理解と共感を可能にしてくれる。伝記的研究が明らかにするものは、しばしば、なにかがなぜ書かれたのかという理由だが、また、同時に、なにかがなぜ語られていないのかという理由にも気づかせてくれる。（そもそも語られないということ自体が、多くを物語っている場合もよくあることである。）そうした心の内奥の事情を勘づかれることを不都合とみなすのは、結局のところ、作者だけであろう。

ホーフマンスタール自身は、作品解釈から伝記的なものを排除すべきだと激し

く（威嚇的に）主張したが、ヴァインツィーアルは、その目的は自己の秘密を隠蔽することにあつたと考えている。²⁶⁾ 我々はもっと大胆かつ無作法に、作者の策略に対抗すべきであろう。かつては、伝記主義が作者を神格化したものだが、それを禁ずることも、やはり作者を神格化する結果に繋がるのだとすれば。

IV. 1896年頃のホーフマンスタールの状況

「演じる」ということが、両親との関係の中で行われたことは明らかである。1896年頃のホーフマンスタールにとって、職業の選択という問題が重くのしかかっていた。学業は法律学からロマンス語文学に変更しており、1899年には博士号を取得するが、その後1901年には、ハビリタツィオン論文をいったん提出したうえで取り下げることになる。しかし、まだ1896年のホーフマンスタールは、学者を目指すべきか、文筆業で生きていくのか、迷いの中にあつた。詩的言語が人生にとってどんな意義をもつのかという問いは、それゆえ、この時期のホーフマンスタールにとって、進路決定の問題と密接に絡んだ切実な問いであった。カフカがプラハで経験したような、父と息子の葛藤は、表面的にはここでは見られない。（法律学から文学への変更など、カフカの父なら絶対に許さなかつただろう。）²⁷⁾しかし、両親の期待に応えなければならないという気持ちは、ホーフマンスタールのうちに当然強くあつたことであろうし、それは、先に見た父への手紙の書き方にも表れていた。

ホーフマンスタールが大学での専攻を変更するに際して、古典文献学者テオドル・ゴンペルツの息子ハリー・ゴンペルツに宛てた相談の手紙がある。

僕は4学期間、法学を学び、国家試験を並の成績で通りました。[...] 一時間たりとも、僕はこの学科に生き生きとした関係を獲得することができませんでした。[...] したがって、他の専門に向かうこと、たぶんそれを口実にすることが、僕の欲求なのです。ただ、市民的な意味では、これぞという進むべき道が見えないのです。僕は、職業をもたずにちゃんと生活していけるほど金持ちではないし、そうなることも決してないでしょうが、また、その一方で、僕自身とある種の人間たちを知悉しているので、僕には国家公務員としての「キャリア」はおおむね閉ざされていることを理解しています。ですから、おのずと、「学者としての経歴」という漠然とした概念が心に浮かぶのです。何が僕をそこへともたしてくれるのか、あなた御自身が、御自分の交際から、見通すことができでしょう。好都合な心情をもった人間を全般的な過大評価へと誘惑することのできる僕の想像力を除けば、おおよそのところ、ウィーンのギムナジウムをよい成績で卒業した者の類型が残ります。たぶん、もう少し広い視野が、幸運に見いだされる種々の交際によって獲得されるでしょう。そこから導

き出されるのは、たぶん、ある歴史的感覚、つまり、事物を極めて非歴史的に眺め、遠くのを近くのものに、卑小なものを偉大なものに関係づけ、すべての過去の事物に存する人間的なものへの強固な信仰の中に、なにかすっきり合点がいくものを嗅ぎつける、ある無鉄砲さです。——この平均的才能が、数学的方面では不意に断ち切られていて、〔…〕抽象的哲学の方面では、少なくとも目覚めてはいないし、教育も受けていません。その代わり、本当に易々と諸言語を習得し、それらの精神を理解するのです。さらに、文学上の趣味、〔…〕造形芸術に対する感覚。これは、私が間違っていないければ、ドイツの諸地方では贅沢な特性に教え入れられているものです。こうした荷物を背負いつつ、左足では法学の階段を下り、右足では上りたいと思っているのです。²⁸⁾

「僕自身とある種の人間たちを知悉しているので、僕には国家公務員としての『キャリア』はおおむね閉ざされていることを理解しています」という曖昧な言い方で、ホーフマンスタールは何を暗示しているのだろうか。手紙を受け取ったゴンペルツには、すぐにピンとくるようなことだったと考えられる。「ある種の人間たち (gewisse Gruppen von Menschen)」という言葉でホーフマンスタールが指しているのは、もちろん直接的には、実際のな生とは折り合いが付きにくいと感じている芸術家や文士たちであろう。だが、「閉ざされている (verschlossen)」という言い方に、「出自にまつわるコンプレックス」を読み取るとすれば、それは深読みしすぎであろうか。ゴンペルツの助言に従って、1895年10月、ホーフマンスタールはロマンス語文学の講義を受け始める。ゲーディングやトゥルーマチでの兵役はこの学業の合間を縫って果たされたものである。

この、人生における栄達を願いながらも、国家官吏としてのそれは諦めようとしている、なにか不安げな若者は、東方の辺境での兵役勤務においても孤独の中にあり、その心は常にウィーンを向いている。彼は、トゥルーマチで、抑圧され、隠蔽されてきた自己の中の何ものかに遭遇しかけたが、それは予感のようなものにとどまり、その何かが意識化されることはなかった。それは、ある「状態」にすぎず、なにか徴候のようなものである。しかし、それは「事物」に触発されて生起するものであり、また、彼がしばしば「現実」とか「生」と呼んでいる何ものかであったと思われる。そこから彼はある活力を汲み取ったはずだが、それ自体は無視され、隠蔽されたままである。それは、ただ、彼の中に、現実に対する激しい憧憬のみを残した。

結 び

実は、今回、全く違うテーマの論文を準備していた。書こうとしていたのは、まさにこの頃ガリチアで精力的に執筆活動を展開していた、ルテニア人作家イヴァ

ン・フランコについてであった。ホーフマンスタールの書簡のガリチア描写から抜け落ちているルテニア人の具体的な生の状況は、フランコの作品の中にこそ活写されている。支配者ドイツ系オーストリア人の視線で見ているホーフマンスタールと、コロニアルな状況の中で被支配者側の視点で書いているフランコとの間には、果てしない深淵があるといしか言いようが無い。

とにかく、執筆を開始した時点では、ガリチアについて書こうとしていて、ホーフマンスタールの手紙は単にひとつの挿話として使おうと考えていただけなのだが、いったん書き始めると次々に思い当たることが現れ、次第にこのような論稿に発展していった。また、その際、ヴェルナー・フォルケの評伝をウルリッヒ・ヴァインツィアールの評伝に照らして読み直すという作業が有効であった。フォルケは、とうの昔に読んでいたはずなのに、そこに引用された若き詩人の書簡からの抜粋箇所を読み返すうちに、次々に何かに気づかされ、それに導かれるままに筆を進めてしまった。

ホーフマンスタールのガリチアからの手紙は、彼の作品と人生を読み解く上で、意外に重要な手がかりを与えてくれている。そのことが確認できただけでも、ひとまずはよしとしておこう。ホーフマンスタール研究から暫く遠ざかっていたため、最近の研究に疎くなっていたが、文献を調べながら本稿を書き進めるうちに、案外と面白い状況になっていることに気づかされるところが多々あった。今回は、問題の素描程度しかなしえなかったが、筆者としては、今後の研究に繋がっていく課題をいろいろと発見することができたと考えている。

注

- 1) Hugo von Hofmannsthal und Leopold von Andrian, *Briefwechsel*, hrsg. von Walter H. Perl, Frankfurt a. M., S.Fischer Verlag 1968, S. 63f.
- 2) Werner Volke, *Hofmannsthal*, Reinbek bei Hamburg, Rowohlt 1967, S. 54.
- 3) Hugo von Hofmannsthal, *Aufzeichnungen, Gesammelte Werke in Einzelausgaben*, hrsg. von Herbert von Steiner, Frankfurt a. M., S.Fischer Verlag 1959, S. 121.
- 4) Hans-Albrecht Koch, *Hugo von Hofmannsthal*, München, Deutscher Taschenbuch Verlag 2004, S. 67.
- 5) Hofmannsthal und Andrian, a. a. O., S. 64.
- 6) Vgl. Gerhart Baumann, *Rudolf Kassner / Hugo von Hofmannsthal. Kreuzweg des Geistes*, Stuttgart, Kohlhammer 1964, S. 9.
- 7) Hugo von Hofmannsthal und Edgar Karg von Bebenburg, hrsg. von Mary E. Gilbert, *Briefwechsel*, Frankfurt a. M., S. Fischer Verlag 1966, S. 79f.
- 8) Volke, a. a. O., S. 51.
- 9) Ebd., S. 54. フォルケが父への手紙をどこから引用しているのかは、残念ながらわからなかった。*Briefe I: 1890-1901* (Berlin 1935) ではない。フォルケは、通常、手紙の出典をすべて明記しているが、この手紙に関しては、「父親宛てのある一通の手紙から取ったもの」としか記していない。*Hugo von*

- Hofmannsthal Brief-Chronik. Regest-Ausgabe. Band 1, 1874-1911*, hrsg. von Martin E. Schmid, Heidelberg, Universitätsverlag Winter 2003にも当たってみたが、見つからない。印刷されていない資料であろう。(おそらく、Freies Deutsches Hochstift Frankfurt am Main に所蔵されている、両親宛ての書簡の謄本からではないかと思われる。)
- 10) Hofmannsthal und Andrian, a. a. O., S. 66f.
- 11) Ulrich Weinzierl, *Hofmannsthal. Skizzen zu einem Bild*, Wien, Paul Zsolnay Verlag 2005, S. 137.
- 12) Hugo von Hofmannsthal und Richard Beer-Hofmann, *Briefwechsel.*, hrsg. von Eugene Weber, Frankfurt a. M., S. Fischer Verlag 1972, S. 58.
- 13) Ebd., S. 59.
- 14) Weinzierl, a. a. O., S. 192-4.
- 15) それは先に引用した彼の手紙では、非常に抑制されていて、細やかな気遣いと最後の一文に滲み出ているだけである。アンドリアーンの本モセクシュアリティーについては、Weinzierl, a. a. O., S. 139f. を参照。
- 16) Hofmannsthal und Beer-Hofmann, a. a. O., S. 59.
- 17) <http://www.shtetlinks.jewishgen.org/tlumach/tlumach.html>
- 18) Ebd.
- 19) *Tlumacz-Tlomitsch Sefer Edut Ve-Zkaron*(Memorial Book of Tlumacz), Eds. Blond et al., Tel Aviv, Tlumacz Society 1976.
- 20) Hermann Broch, *Hofmannsthal und Seine Zeit. Eine Studie*, Frankfurt a. M., Suhrkamp 1974, S. 75 : „In dieser so ungemein wienerischen Umgebung wurde Hugo v. Hofmannsthal jun., durchaus ein Wiener und Österreicher, am 1. Februar 1874 geboren.“
- 21) Weinzierl, a. a. O., S. 12.
- 22) Ebd., S. 13.
- 23) ホーフマンスタールの場合には、同化の第四世代にもなるので、問題は、「ドイツ性」と「ユダヤ性」の葛藤ではなく、すでに喪失されてしまったはずの過去との繋がりが、「ユダヤの血統の亡霊」として心の奥底に暗い影を落としていることにある。それは、民族間の対立が激しさを増し、反ユダヤ主義の台頭が顕著になってくる時代の中で、アイデンティティーの基盤の脆弱さを根底に抱えていた、当時のオーストリア帝国の同化ユダヤ人に共通した問題であった。(たとえば、プラハのカフカ。) 一方、同化ユダヤ人の抱えた「二重の精神 (Zweigeist)」の問題は、カール・エーミール・フランツォース (1848-1904) に典型的に表れている (「私は同時に、ドイツ人でもあり、ユダヤ人でもあった。」 Karl Emil Franzos, Vorwort, in : *Der Pojaz*, 7. Auflage, Hamburg, Rotbuch Verlag 2005, S. 6)。ホーフマンスタールがトウルーマチの次にガリチアで兵役を勤めたチョルトコフ (現ウクライナ、チョルトキウ) で子ども時代 (1859年まで) を過ごしたフランツォースは、ドイツ文化圏への同化を啓蒙の「光」への道として積極的に肯定したが、同時に、東欧のユダヤ人の世界を絶えずその作品の舞台としている。Vgl., Oskar Ansell, Zweigeist und Lichtzieher, in *Zweigeist. Karl Emil Franzos. Ein Lesebuch von Oskar Ansell*, Potsdam, Deutsches Kulturforum östliches Europa 2005, S. 10 : 「小説集『バルノフのユダヤ人』がすでに生前に16の言語に翻訳されていた、この生来の物語作者の人生行路は、故郷を去り、故郷を想像しながら、かずかずの信念と謬見を経たのであるが…根本的に存在の過ちの物語であり、それは振り返ってみても、悲劇的な特徴を示している。あたかも、彼の光への固執が、どちらかというとき自己の状況の解明への願望に向けられていて、(彼の見解によれば) 闇の中に沈んでいた当時の東方の照明には、さほど向けられていなかったかのようだ。」

24) Weinzierl, a. a. O., S. 11.

25) Ebd., S. 12.

26) 「リルケの娘へのある手紙によって後世に伝えられた、彼の全身全霊を震撼させる言葉は、不気味な威嚇として、いかなるものであれ、作品を越えた接近を防止するはずであった。『もし、私が自分の死がとても近くに迫っているのを感じているのであったら』とフーゴー・フォン・ホーフマンスタールは、父ライナー・マリア・リルケの文通の選集を計画していたルート・ジーバー・リルケへの手紙に書いた。『指示を遺言として残すことでしよう〔…〕、これらの多くの、つまらぬ、しばしば無思慮な、一人の生産的な人間とその作品についての発言、この水を差すようなおしゃべりを、公表しないようにと。少なくとも、私的な手紙とメモを、すなわち、愚かな伝記主義とあらゆるこの種の見苦しさの障害を取り除くことによって、可能な限りその養分を奪い取るようにと。』もっと以前、彼は——書簡の公開に際して——これよりもっと激しく、『言語道断な無思慮と無作法』に抵抗して戦いさえした。『僕にはわからない』と、彼はすでに1908年に厳しく苦言を述べた。『これらの擬似文献学的な尊大と低級な無知が、ペンを我がものにするやいなや、公然と礼儀の最も初歩的な規則を無視する大胆さを、どこから手に入れるのかが。それと類似の違反は、市民や農民の家では、罰せられずにはおかないだろう。』ドイツ文学研究者ヴァルター・プレヒトの手にゆだねられた覚え書『アド・メ・イブスム』にも、同じように威嚇的なものが見つかる。『接近してきた者たちがいる』とホーフマンスタールは、1926年11月初めに書き込んだ。『私の伝記を書くことを許してほしいと。とても奇妙で不愉快な要求だ。挿話—滞在—出会い—影響。純粹に精神的な冒険を理解することの不能。〔…〕伝記を作る者は、自らを対等に置く。』20世紀には、明らかにだれも、ぶしつけで分不相応な思ひ上がりという非難に、身をさらそうとはしなかった。そのように、フーゴー・フォン・ホーフマンスタールは事実やり遂げた。二次文献の夥しさ（それはカフカ、プレヒト、トーマス・マン研究に肩を並べる）にもかかわらず、今日に至るまで、厳密な意味における彼の伝記は存在しない。」(Weinzierl, a. a. O., S. 11.)

27) クラウス・ヴァーゲンバッハ『若き日のカフカ』中野孝次訳、ちくま学芸文庫、筑摩書房、1995年、149-52頁参照。

28) Volke, a. a. O., S. 51f.